

家も僕の心の中もモヤモヤだった

すこし、雑談。

てるちゃんが、ごはんをよそってくれて、お茶を入れたりしながら、僕にいろいろ話す。

よく喋る人やなあと思った。

昔は僕を、近所の銭湯と一緒に連れて、行ってくれた事もあり、今でも、てるちゃんは、僕を、ちっちゃい弟のように扱っている様だ。

僕の前で、はでな色っぽい服装もおかまいなし。胸の谷が深く見えて、僕の方が困った。

僕は、はずかしくて、目の置くところがない。

しばらくして、てるちゃん、そのまま、お母ちゃんの後を追って、おばとこへ行った。

さあ、夕めしとなる時である。

起き上がって来たおばあちゃんの顔にあざが出来て、まっ青なのに気がついた。

僕はびっくりして、

「おばあちゃん、まだ、寝てなあかんがなあ。」と、言った。

そして、おばあちゃんの顔を、氷水の手拭いで冷やす。おばあちゃんの顔を、氷水の手拭いで冷やす。